

ガブリエル・マルセルの手紙

鳥尾 理沙

Letters of Gabriel Marcel

TORIO Lisa

ガブリエル・マルセル（1889-1973）が自身の哲学思想を体系化しなかったことは、よく知られている。マルセルの第一の主著『形而上学日記』（*Journal Métaphysique*, 1927）は、第一次世界大戦直前の1914年から1923年にわたって書かれた日記をまとめたものである。その後もマルセルは「形而上学日記」を書き続け、1928年から1933年までの日記は第二の主著『存在と所有』（*Être et avoir*, 1935）として、また1938年から1943年の間に書かれた日記は彼の講演用の原稿とともに『現存と不滅』（*Présence et immortalité*, 1959）として編纂され出版された。『存在の神秘』（*Le mystère de l'être*, 1951）や『人間の尊厳』（*La dignité humaine*, 1963）など、その他の主要著作は、マルセルが大学などで行った講義の原稿をもとに出版されたものが多い¹。さらに、自身の哲学的思索と劇作活動の不可分性をつねに強調していたマルセルは、生涯手掛けた数々の劇作品が自身の哲学思想を最もよく表すものとした。日記、講義、劇作というかたちで残されたマルセルの思索が、「曲がりくねった道（*chemin sinueux*）」とも呼ばれるように、断片的で全体像がつかみにくく、未完成の印象を与えることは否めない。しかし一方で、それはつねに生き生きとした問いの中で模索しようとするマルセルの哲学に対する一貫した姿勢を反映している。マルセルの諸著作は彼の哲学思想を研究しようとする者に対して、諸々の著作を通して深められる問いの道程を追体験し、ともに模索することを要求するといえる。

マルセルの思索の“道程”を辿ることができる資料が、テキサス大学オースティン校のハリランソムセンター（Harry Ransom Center）に所蔵されている。本研究センターの「ガブリエル・マルセル・コレクション」は、55冊のマルセル直筆の研究ノートや日記に加えて、彼が友人や生徒と交わした50通以上の手紙やクリスマスカード、家族や同僚との写真、未刊行の劇作品やエッセイ、彼の作品についての批評や新聞記事、さらには彼が作曲した手書きの楽譜などを含む多くの資料から構成されている。マルセルが学生時代にたどった思考プロセスを記した貴重な資料として、コレージュ・ド・フランスで行われていたベルクソンの講義を当時十九歳だった彼が聴講した際にとっていた講義ノート（“Cours de Bergson, 1908-1909”）や、F.H.ブラッドリーの哲学についての読書ノート（“Notes de Bradley, 1909”）、学位論文の準備用ノート（“Notes de 1912-1913 Pour le thèse”²）などがある。また、『形而上学日

記』のもとになった日記が綴られた三冊のノート（“Journal métaphysique”）の他に、第二次世界大戦中に書かれた未刊行の「戦争日記」（“Journal de guerre”）が所蔵されており、後期マルセルに見られる歴史と政治への強い関心の生成過程をたどることができる³。

これらの資料の所蔵をハリランソムセンターに依頼したのは、ダーウィン・ヤリッシュという一人のカナダ人であった。七つの箱に収められた諸々の資料は、すべて彼が収集したものであり、個人のコレクションとしては膨大な量である。ヤリッシュの生い立ちや経歴についてはほとんどわかっていないが、本コレクションには彼が晩年のマルセルと四年にわたって交わした 26 通の未刊行の手紙が含まれている。これらの手紙には、一人の青年と老いた哲学者の友情の痕跡が残されている。「ガブリエル・マルセル・コレクション」として所蔵されている諸々の資料を扱った研究は少なく、今後これらの資料を綿密に検討していく必要があるが、本稿ではひとまずマルセルがヤリッシュに宛てた手紙に着目することにしたい。

* * *

1968 年、当時十九歳だったカナダ人学生のヤリッシュは、著名な哲学者たちに自身の論文に対する助言を求める手紙を送っていた。本コレクションにはヤリッシュへの返事のみが所蔵されているため、実際に彼が何人の哲学者に手紙を送ったのか、またどのような論文を執筆したのかは定かではない。十九歳の青年にしては大胆とも思われる依頼に対して、晩年のハイデガーは次のような返事を送っている。「お手紙のご要望にお答えできないことを、お詫び申し上げます。私も高齢なので、自分の仕事に専念しなければなりません。どうかご理解ください」⁴。また、ヤスパースの妻ゲルトルートはヤリッシュ宛に次のような返事を書いている。「ご親切なお手紙を送ってくださったことに、夫は大変感謝しています。残念ながら夫は病気のため、自らお返事することができません。私自身も直接お答えすることができないこと、どうかお許しください」⁵。ヤリッシュのもとにマルセルからの最初の手紙が届いたのは、翌年 1969 年の 5 月である。彼の返事は次のようなものであった。

昨夜、あなたの感動的なお手紙を受け取りました。どうしてすぐさま返事を書かずにいられるのでしょうか？ あなたの呼びかけが、とても遠いところから、そして孤独の中で自分の進むべき道を探している者からの呼びかけであることを知り、深く感動しました。ぜひあなたの原稿を送ってください。ただ、一つお伝えしなければならない困難な事情があります。ここ数年の間に私の視力はかなり衰えてしまい、印字された文字を読むことに大変疲労します。そのため、あなたのお手紙を同居している義理の姉に読み上げてもらったのですが、彼女はある程度英語を理解できるものの、発音が非常に悪いのです⁶。

五十八歳で妻ジャクリーヌを亡くしたマルセルは、義理の姉ジュヌヴィエーヴとともにパリのトゥルノン通りにある家に暮らしていた。この時マルセルはすでに七十九歳であり、視力の低下に加えて、字を書くことも、歩くこともままならない状態にあった。マルセルはすでに晩年を迎えていたが、彼は青年の依頼を快く引き受け、二人の交流は始まったのである。

しかし、ヤリッシュの論文に対するマルセルの応答は、最初の手紙の穏やかな印象を裏切るような手厳しいものであった。マルセルは同年7月8日付の手紙で、ヤリッシュの論文が諸々の概念を「それらに価値と意味を与えるはずの具体的な状況 (situations concrètes) を全く参照せずに提示している」ことを批判している⁷。

あなたはいまだ言葉に囚われています。これは哲学者を目指す者たちが非常によく犯す誤りです。〔……〕あなたが強い関心を持つ諸々の概念をできる限り具体化 (concrétiser) する必要があります。〔……〕『旅する人間』をお読みになったのであれば、私が「希望」について述べたすべてのことを具体的に描き出すために、どれほどの注意を払ったかわかるはずです。

これが実際のところ、自分が本当に何かを言ったということ、自分の思想が本当に現実とつながっているということ、あなたが自分自身に対して証明することのできる唯一の方法なのです (〔……〕 le seul moyen de vous prouver à vous-même que vous dites vraiment quelque chose, que votre pensée a un contact avec le réel)。

〔……〕お分かりの通り、これは私があなたに興味がないということの意味するのでは全くありません。むしろ、せつかく私にこれほどの信頼を寄せてくださったのですから、もっとあなたの状況について、あなたが直面している困難について、私に話すべきです。そうすれば、あなたとより直接的に、より人間的に話し合うことができると思います。

ここでマルセルのいう「具体的な状況」について少し補足する必要があるであろう。『形而上学日記』に見られるように、マルセルの哲学的思索はヘーゲルの絶対的観念論を始め、あらゆる観念論に通底する〈個人的かつ具体的なもの〉を排除する傾向への強い危惧に出發し、「客観性 (objectivité)」に解消されることのない「生きられた経験 (expérience vécue)」の回復へと向けられた哲学的反省として深化していく。マルセルが自身の哲学的立場とする「具体的哲学 (la philosophie concrète)」の中心には、つねにこの「抽象化の精神 (esprit d'abstraction)」に対する批判がある。マルセルにとって客観的思考とは、諸々の事物を識別し特徴づけることによって、それを認識する者とは切り離された「対象 (objet)」とするような思考態度である。マルセルの思索は一貫して、客観 - 主観という図式に依拠する思考態度が捉えることのできない〈感受される身体〉の感覚を手がかりに、「具体的なもの (la concrète)」へ立ち返る哲学的反省の道を切り開く試みであるといえる。

さらに、マルセルの第一次世界大戦の経験が彼の「抽象化の精神」に対する批判をより一層強固にしたことは注目に値する。第一次世界大戦中、マルセルはフランスの赤十字でボランティアとして働き、行方不明になった兵士の家族からの問い合わせを担当していた。兵士たちを必死に探す家族と接する中で、戦地の兵士たちに関する情報が記された検索カードの一枚一枚が生身の人間と結びついていることを痛感した、とマルセルは晩年の自伝的著作『道程——いかなる目覚めへの？』(*En chemin, vers quel éveil*, 1971) のなかで述べている。マルセルによれば、こうした戦時中の経験から、新聞記者や歴史家たちが用いる抽象的言語の「抹消する力」に強い危機感を抱くようになり、それまで学問的な枠組みにとどまっていた「抽象化の精神」の批判はよりいっそうリアルな問題に対する応答へと深化したのである。「『形而上学日記』の第一部に見られる観念論的残滓を完全にに取り除き、私を実存思想家にしたのは、やはり戦争であった」(CQE,97)。

ヤリッシュの論文に対するマルセルの批判には、以上のような彼の「抽象化の精神」に対する基本的立場が色濃く反映されているように思われる。それは具体的で個人的である〈生きられた経験〉を抹消するような「抽象的言語」に向けられている⁸。1970年1月6日付の手紙で、マルセルはヤリッシュの哲学的思索だけでなく、彼の詩作活動に対する態度を見直すよう促している。

私の目から見て、あなたが哲学と詩の間にある中間地帯に定住しようとしていることは明白です。そこは詩人と哲学者の両者に重くのしかかる制約から除外されているかのような無関税地帯 (*une zone franche*) であり、あなたはそこで中立国が自負するようなある種の安全を享受できていると思っています。はっきりと言いますが、それは幻想に過ぎません。この偽りの安全は否定的なものでしかなく、あなたは「神秘」、「希望」、「沈黙」といったこれらの言葉を定義せず、いまだ議論の外に身を置いているのです。親愛なる友よ、これらの言葉を使うということは、それを使う者にある種の用心深さ (*une vigilance*) を要求することをわかってください。あなたは残念ながらまだこのことの本質と必要性にお気づきではないのだと思います。ここで私のいう用心深さとは、文章を書き終えるたびに自問することなのです。「私が書いたことは正確な意味を持っているだろうか？ もし私が書いたことの意味を理解できないという人がいれば、私はその人に説明することができるだろうか？」、と。

これらの批判があなたにとって少し苦いものであることは十分承知しています。しかしながら、あなたにこれらのことを言わなければ、私は友情によって課される義務を果たすことはできないと思ったのです⁹。

マルセルにとって詩人と哲学者の両者に「重くのしかかる制約」とは、言葉に対する〈用心深さの要求〉であり、それは「抽象的言語」が持つ生きられた経験を「抹消する力」に対する用心深さを意味していると捉えられる。『人間の尊厳』のなかで、マルセルは言葉につ

いて次のように述べている。「伝統的な哲学は、真理がそれを述べる者が置かれている状況とは何ら関係のないものであるという原則を立てることに、われわれを慣らしてきた。〔…〕だが、言明の存在論的な重み (le poids ontologique de l'affirmation) は、言明されたことの内容以上の何か (quelque chose) を含む〔……〕」¹⁰。マルセルは言語に関するまとまった論述を行っていないため、曖昧さも残っているが、彼が言葉の「存在論的重み」という点に着目していることには注目すべきである。マルセルにとって真実とはそれを言表する人間の具体的状況と解き難く結びついているのであり、その人間に固有の状況が彼／彼女が語る真実に「存在論的重み」を与えるのである。これに対して客観性に基づく抽象的言語とは、人間の生きられた具体的な経験から切り離され、あたかも客観的で中立的な言葉であるかのように扱われる言葉だといえる。

以上述べてきたことを踏まえれば、マルセルがなぜ自身の劇作品に特権的な立場を与えているか理解することができる。マルセルの諸々の劇作品では、登場人物たちが直面しているジレンマや決断、思いのすれ違いなどが、生々しく描き出されている。登場人物たちによって発せられる嘆きや怒りの言葉、あるいは喜びや信頼の言葉は、彼らが直面している具体的な状況の只中から発せられた言葉であり、一人ひとりに固有の状況と切り離して十分に理解することはできない。つねに抽象化の危険を伴う哲学的言語に対して、劇作は〈人間の生きられた言葉〉が持つ「重み」を捉えることができるといえる。1969年8月6日付の手紙のなかで、マルセルは劇作について次のように述べている。「私が自分の作品のなかで劇作が最も重要であり、私の哲学的著作に比べてより多くのことを明かすことができると思うようになったのは、私の具体的なものへの要求 (mon besoin du concret) が人生を通して増していったからです。」

だが、抽象化されてしまった言葉を再び“具体化”するには、一体どうすれば良いのだろうか。マルセルの手紙を受け取った青年は戸惑ったに違いない。この問いに対して、マルセルは1970年2月11日付の手紙のなかで次のような手がかりを示している。

私から今あなたに助言できることがあるとすれば、定期的に日記をつけることです。そこにあなたの経験を書きとめるのです。そこからあなたの思考は発展し、他者に伝えることができる (devenir communicable) ようになります。¹¹

マルセルが書き残した数々の日記には、日々の出来事だけでなく、その時々迷いや葛藤が綴られている。『現存と不滅』の序文のなかでマルセルは次のように述べている。「私が1925年頃から体系的な哲学的著作を書くことを意図的にあきらめたことは、私の思想を真剣に検討したことのある者なら誰も知っている。それ以来、私の思考はますます私にとって一つの歩み (un cheminement) として現れてきたのであり、それは手さぐり (des tâtonnements)、停止 (des arrêts)、再出発 (des reprises)、問い直し (des remises en question) を含む、時として危険な道程であった」¹²。マルセルにとって日記を書くことはまさ

に「発見の旅 (un voyage de découvertes)」に出ることであり、そこで繰り広げられる諸々の反省が「回復的反省」なのである¹³。日記という一つの「歩み」を通して他者に伝える“自分の言葉”を探求することが、生き生きとした具体的経験の〈回復〉への道につながっているのではないだろうか。

* * *

ヤリッシュの論文に対するマルセルの批判は、長年培われてきた友情でも壊しかねないほど厳しいものであったように思われる。だが、マルセルがヤリッシュに宛てた 1970 年 1 月 26 日付の手紙は、青年がマルセルの批判に真摯に向き合い、全力で応答したことを伝えている。「あなたの長い手紙に深く感動しました。あなたを傷つけ、怒らせてしまったのではないかと心配していましたが、あなたが勇敢にも私の批判を適切に受け止め、それが何に基づいているのかを理解してくださったことが伝わったからです¹⁴。」このようなマルセルとヤリッシュのやり取りを見ると、二人の関係は友人同士というよりも、むしろ師弟関係に近いように思われる。だが、1971 年 12 月 8 日付の手紙が示しているように、マルセルが「友情の義務」を決して一方向的なものとして考えていなかったことは明らかである。「あなたのもとにガリマル出版社から私の新著が航空便で届いたかと思います。〔……〕もし本をお読みになって内容が難しすぎると感じたならば、そのことを私にきっぱりと率直に言っていただかなければなりません。私はあなたを恨んだりはしませんので安心してください。むしろ、その行為を私は誠意と勇気の証として受け止めます」¹⁵。

その後、マルセルは金銭的に余裕のない状況にあったヤリッシュを自費でパリに招待し、1970 年 7 月にヤリッシュが初めてパリを訪れたことが手紙から窺える。本コレクションには、パリに滞在していたヤリッシュが母親に宛てたポストカードが所蔵されている。ポストカードの表には夜のシャンゼリゼ通りの風景が写っていて、裏には小さい文字がぎっしり詰まっている。

お母さん、元気になっている？ 僕は本当に素敵な時間を過ごしているよ。有名な観光スポットにはほとんど行った。フランスはまるで別世界だね。マルセルはとても親切で、僕が出会った中で最も素晴らしい人だよ。彼との会話も素晴らしくて、とても頼りになる存在なんだ。パリでの食事は一日 2 ドルかかるけど、僕は 1 ドルしかもっていない。痩せることに期待。ダーウィンより。¹⁶

カナダに帰国した後も、ヤリッシュはマルセルに手紙を送り続けた。マルセルがヤリッシュに送った写真やクリスマスカード、自らが作曲した楽譜なども本コレクションに所蔵されている。また、マルセルの義理の姉ジュヌヴィエーヴがヤリッシュに宛てた手紙も残されており、そこには「親愛なるカナダ人の友へ (cher ami Canadien)」と書かれている。マルセ

ルが四年にわたってヤリッシュに宛てた二十六通の手紙には、進路相談に関するアドバイスや、当時の政治的状況に対する反応、特に冷戦下の危機的状況に対する彼自身の考えなどが綴られている。ヤリッシュのもとに届いた最後の手紙は、長年マルセルの秘書を務めたジュリアン・ラノエからのものであり、それはマルセルが亡くなったことを告げるものであった。

マルセルは人間の根源的な経験の一つを人間同士の「出会い (rencontre)」に見出している。人間同士の「出会い」とは、決して対象物の関係に置き換えることはできないものである。対象物の関係とは、椅子とテーブルを横に並べる、というような並置の関係である。椅子とテーブルは独立した対象物であるため、テーブルを取り去っても、椅子には何の変化もない。こうした関係が外的なものであるのに対して、マルセルは人間の関係が内的なものであり得ることを指摘する。つまり、人間同士の「出会い」は「内面的変化 (transformation intérieure)」をもたらすことができる¹⁷。「出会い」とは、われわれの中でそれ以前と以後を区切るような出来事、その変化が何であるかはわからないが、確かにこの人と出会って何かが変わった、というような経験である。その後ヤリッシュがどのような経緯を辿ったのかは定かではないが、ハリランソムセンターに所蔵されているマルセルの手紙は、彼と一人の老いた哲学者の「出会い」の証である。

※ 本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものです。また、本研究ノートを作成するにあたり多大なご協力を賜りましたハリランソムセンター (Harry Ransom Center) の関係者の皆様に、この場を借りて、心より感謝申し上げます。

注

¹ 『存在の神秘』はマルセルが1949年と1950年に行ったギフォード講義、『人間の尊厳』は1961年にハーバード大学で行った講義の原稿である。

² “Notes de 1912-1913 Pour la thèse”と表記すべきであるが、Harry Ransom Centerのコレクションリストには“le thèse”と表記されているため、ここではそのまま引用している。

³ マルセルが1960年代に本格的に試みていたオーストリアの哲学者フェルディナンド・エーブナーに関する研究の準備ノートを始め、本コレクションには、完成することのなかった研究の準備資料や、未刊行の作品が多く含まれている。

⁴ Gabriel Marcel Papers, 6.5, Harry Ransom Center, The University of Texas at Austin.

⁵ Ibid.

⁶ Gabriel Marcel Papers, 5.8, Harry Ransom Center, The University of Texas at Austin.

⁷ Ibid.

⁸ ここで言う「個人的」経験とは、他者から切り離された「個人」の経験を指すのではないことに注意が必要である。マルセルがいうところの「回復的反省 (réflexion récupératrice)」とは、客観性に基づく批判的かつ分析的思考によって分断された〈私〉と〈私の身体〉との結びつきの回復に出發し、〈私〉と〈世界〉との結びつき、さらには「汝 (toi)」としての他者たちとの「生きた絆 (lien vivant)」の回復へと向かう哲学的反省なのである。そのため、マルセルにとって真に具体的かつ個人的な経験とは、他者と「ともにいる (avec)」〈私〉としての個人の経験でなければならない。

⁹ Gabriel Marcel Papers, 5.8, Harry Ransom Center, The University of Texas at Austin.

¹⁰ Gabriel Marcel, *La dignité humaine*, Aubier (Paris), 1964, p.90.

¹¹ Gabriel Marcel Papers, 5.8, Harry Ransom Center, The University of Texas at Austin.

¹² Gabriel Marcel, *Présence et immortalité*, Flammarion (Paris), 1959, p.9.

¹³ Ibid, p. 10.

¹⁴ Gabriel Marcel Papers, 5.8, Harry Ransom Center, The University of Texas at Austin.

¹⁵ Ibid.

¹⁶ Gabriel Marcel Papers, 6.4, Harry Ransom Center, The University of Texas at Austin.

¹⁷ Gabriel Marcel, *Le mystère de l'être*, Vol.1: Réflexion et mystère, p. 56.